

Blatn

少年、

機関車に

乗る

- ヨーロッパ各国映画祭で数々のクラウンを受賞!
- ★1991年マンハイム国際映画祭 クラウン・国際批評家賞 受賞
- ★1992年トリノ国際映画祭 クラウン 受賞
- ★1991年ナント国際映画祭 観客クラウン・国際批評家賞 受賞
- ★1991年フライブルク映画祭 国際批評家賞 受賞
- ★1991年ロッテルダム映画祭 出品
- ★1992年ヘルシン国際映画祭 出品
- ★1992年香港国際映画祭 出品

監督 バフティヤル・フドイナザーロフ
 撮影 ゲオルギー・サラエフ
 脚本 バフティヤル・フドイナザーロフ レオニード・マフカーモフ
 主演 チムール・トウルスノフ フィリス・サブザリエフ
 1991年 タジキスタン・旧ソ連合作 白黒 スタンダードサイズ 1時間40分
 配給 ユーロスペース

中央アジアの大平原に行く“レール・ロードムービー”

少年、機関車に乗る

監督 バフティヤル・フドイナザーロフ
 撮影 ゲオルギー・サラエフ
 脚本 バフティヤル・フドイナザーロフ レオニード・マフカーモフ
 主演 チムール・トウルスノフ フィリス・サブザリエフ
 1991年 タジキスタン・旧ソ連合作 白黒 スタンダードサイズ 1時間40分
 配給 ユーロスペース

いまこそ『少年、機関車に乗る』を嫉妬する特権を行使しようではないか
 蓮實重彦



★あなたは嫉妬しなければならない。義務ではなく、喜ばしい権利として、『少年、機関車に乗る』という映画をひたすら嫉妬しなければならない。そして、嫉妬という心の動きがな自分に可能であった事実を、素直に祝福しようではないか。祝福するだけではもの足りないというのであれば、『少年、機関車に乗る』に感謝の念をささげてもいっこうにかまわない。とにかくこれは、冒険であり、運動であり、魔術でもあるようなフィルムなのだ。しかも、それが奇跡ではなく、まぎれもない現実として撮影されてしまっているのだから、事態は切迫しているといわねばなるまい。遥かに響く発車のベルを耳にしたときのように、あなたは落ち着きを失い始める。



★すべては、幸福な運命を約束する呪文のような単語とともに始まった。誰かが意味もわからぬまに「ブラタン」と口にする、それを聞きつけた何人ものひとが、低く「ブラタン」と応じる。たかひに敵意のなさを確認しあう儀式としては、それでもう充分だった。国籍の違いや性別にはかかわりなく、そのひそかなつぶやきを合言葉として、世界のスクリーンに思いもかけぬ運命の輪が拡がってゆく。呪文としての「ブラタン」の一語は、いま、日本でも間違いなく流通し始めようとしている。もちろん、あらゆるひとに、その言葉をつぶやいてみる権利が約束されている。さあ、遠慮している場合ではない。あなたも、おめざし「ブラタン」と口にしてみてはどうか。その瞬間、あなたの視界には、

『少年、機関車に乗る』の画面が爽やかに流れ始めることだろう。そして、その百分後に、あなたは、頬のあたりをゆるませながら、「ブラタン」とつぶやきつつ映画館をあとするはずなのだ。
 ★ながら「ブラタン」として一部の映画好きたちを狂わしていたタジキスタン映画の傑作が、いま、『少年、機関車に乗る』という胸躍る題名のもとに、日本のスクリーンに登場しようとしている。タジキスタンと旧ソ連との合作だというのが、監督の名前はバフティヤル・フドイナザーロフ。請けあってもよいが、この聞きなれぬ固有名詞は、もっとも貴重な映画作家の名前として、いともたやすく記憶に刻みつけられてしまおうだろう。『少年、機関車に乗る』は、そのフドイナザーロフが26歳のときに撮った監督第一回作である。彼は、生涯に一度しか作れないはずの処女作に、あろうことか機関車を走らせてしまった。それだけで、このタジキスタンの青年監督がたものではないと即座に理解できるはずだ。いまでもなく、リュミエール以来、鉄道こそ、映画の考古学的な憧憬につながる特権的な細部だからである。

★実際、何輛かの貨車を引いたディーゼル機関車が、少年とその兄貴とを乗せて、中央アジアの乾いた風景の中をゆっくり走り始める瞬間、あらゆるひとの背筋に戦慄が走りぬげる。幼いふたりが、なぜ旅にでるのかなどと野暮なことはきかないでほしい。列車がレールの上を滑るだけで、映画は成立するとフドイナザーロフは信じて疑わないのである。事実、線路の脇をたった一台のトラックが疾走するだけで、画面は映画ならではの艶をおびるだろう。機関車の前を数頭の馬が走り抜ければ、フィルムにはさらに艶やかな彩りかます。そうかと思うと、寡黙な女性たちが運転席に乗り込んできて、少年との間に、サスペンス豊かな視線のドラマをもちあげる。あるいは、まったく唐突に、悪童どもが機関車めがけていっせいに



石をなげたりして、緊張をほぐしてくれる。
 ★そう聞いただけで、誰もが、息のつまるほどの胸騒ぎを覚えずにはいられぬはずだ。あらゆる細部が、これは映画だといっせいにつぶやいているからである。そのとき、あなたも、「ブラタン」とつぶやく特権を間違いなく手にしたことになる。「ブラタン」、「フドイナザーロフ」、「少年、機関車に乗る」。いまや、この三つの呪文は、完璧な力で連帯の輪をおし拡げようとしている。

ものがたり

- ♥17歳のファルーと7歳の弟アザマットはおばあちゃんと3人暮らし。兄弟は遠くの町に住む父親に会うために、オンボロ機関車に乗って旅にでた。旅には予期せぬ出来事が待ち受けている。
- ♥駅でもないのに橋の下で機関車が停まる。着替えや食料が橋の上から機関車におろされる……運転士の実家だったのだ! かと思えば、線路沿いに走るトラックと踏切までの猛烈なチェイスが始まったり、峡谷をガタゴト走っていると、悪ガキどもが石つぶてを投げつけてくる。
- ♥なぜか土を食べる奇癖をもったアザマットはすっっぱけて可愛らしい。そんな弟(ロシア語で「ブラタン」)を優しく見守るファルー。二人を乗せた機関車は中央アジアの大平原をガタゴト走っていく。

7月17日(土)より夏休み独占ロードショー!

特別鑑賞券1300円絶賛発売中

(当日一般1600円/学生1300円/小・中学生・シニア1000円)

当劇場窓口および都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケット・センソにてお求めください。

上映時間

月→金	12:30	2:40	4:50	7:00
土日祝	11:30	1:40	3:50	6:00

ユーロスペース TEL. 3461-0211
 渋谷駅東急プラザ口下車2分 東急観光うしろ